

過程を培養条件下で詳細に観察する事ができた。培地は M3-medium (Rayburn & Starr, 1974) に有機物とビタミン類を添加したもので、培養条件は温度約 20°C, 照度約 4000 lux; 14 hr light-10 hr dark であった。有性生殖の誘導の方法は Coleman (1959) に準じた。有性生殖の過程は基本的には Coleman (1959) の結果と同じであったが、mating reaction と gone colony の形成に関しては異なる結果を得た。

---

○種類の数の勘定のしかたについて (伊藤 洋) Hiroshi ITO: How to count the number of taxa in a certain flora

何々県植物誌、何々山植物目録といったフロラ誌では、総論の部に「本地域の植物は何科何属何種何変種何品種総計何種を数え」などと種類の数を挙げていることが多い。ところが目録に従って数え直してみると、挙がっている数と合わない場合が間々ある。実は間々というより又かというくらい時々行き当たる。科や属の方はほとんど問題ないが、変種や品種を伴った種に問題が多いようである。今簡単のためゼンマイとワラビの二つだけしかないフロラを考えてみよう。学名はそれぞれ *Osmunda japonica* と *Pteridium aquilinum* var. *latiusculum* である。誰が見てもこれは明らかに 2 種であるが、これが 1 種 1 変種だったり 2 種 1 変種だったりするのである。恐らくそれは var. がついていると変種だとばかり思い込んで種を忘れてしまうのか、目録の場合は var. 以下を改行して印刷することが多いため安易に数えてしまうのか、いずれにしても var. に釣り込まれる結果ではないかと考えられる。それに、本例には関係ないが *P. aquilinum* var. *aquilinum* の var. 以下を略した場合と取り違えて数えることも起り得るわけである。言い替えると (このような言い方もあまりよくないが) 母種と変種の両方がある場合と、変種だけがある場合との混乱である。

上のようなことから数の計上は種までに止めるべしと私は考える。その上ある種では変種や品種がやたらと多く他の種では少ないなどということもあり、また変種や品種の重みというか変異の程度というものも違うので、数だけ数えて多い少ないを暗示したところで意味ないことではなかろうか。なお、和名だけの目録の場合は変種も品種も見かけ上は全く種と同じであるから、合計いくつ (多くの場合合計「何種」と書かれる——合計「何種類」の方がまだましのように思われるが) と数えることは無意味の最たるものであろう。

(東京都文京区 [redacted])